

労働運動と謎の三色旗

—組合旗の起源と歴史—

植村 邦彦

大阪の社会労働運動と政治経済研究班主幹
関西大学経済学部教授

1. 謎の三色旗

題名に掲げた「謎の三色旗」というのは、大阪産業労働資料館が所蔵している「日本労働総連盟」傘下の「映画従業員組合」本部の旗のことである（画像1）。1935年に作られたものなので80年前の旗だが、色も褪せずにきれいに残っている。よく見ると、縁飾もかなり手の込んだ、お金のかかった旗だということが分かる。デザインも独特で面白いが、これが一体どういう旗なのか、何故こんな旗なのか、それがよく分からない。

三色旗といえばフランスの国旗（トリコロール）を思い浮かべる人が多いと思うが、フランス国旗は縦に色が分割されている。横に三色が並ぶ旗には、ドイツやロシアの国旗があるが、国旗に使われている三色旗はたいいてい色が同じ比率（面積）になっている。ところが、この「映画従業員組合」の旗は、黒と赤が同じくらいの幅で、青が大分幅広い。こういうデザインの三色旗自体が極めて珍しいし、黒・赤・青という色の並びも珍しい。

実は、この旗とほぼ同じデザインの旗が別にある。上部組織の「日本労働総連盟本部」の旗である（画像2）。手がトーチを握っているデザインも同じで、周りに黒い房飾りが付いていて、これもなかなか手が込んでいる。名前からすると全国組織のように見えるが、実は大阪の組合である。「日本労働総連盟本部」の旗と「映画従業員組合本部」の旗を比べると、前者が基本型で後者はその応用型だということが分かる。後者は、映画従業員の組合らしく、映画のフィルムを巻いたものが図案化され、そこに手が出ている。上部組織の方の旗は1931年に作られたもので、これも大阪産業労働資料館が所蔵している。

今でこそ組合の旗にも水色や青はよくあるが、昔は労働組合の旗はたいいてい赤色だった。画像3は、日本では初期の頃の労働組合旗で、1920年代に作られた「全日本鉱夫総連合」の旗である。東京の法政大学大原社会問題研究所が所蔵している。

大阪産業労働資料館は、労働運動関係の資料や旗や昔のピラなどの現物を保存している資料館で、出発点は戦後の大阪府の労働文庫まで遡る。2008年に維新の会の大阪府政が成立するま

では、府からの援助を受けていたが、その後は補助金をカットされ、存続が危ぶまれる状態になって細々とやっている。

大阪にはかつて1919年に設立された「大原社会問題研究所」があった。クラボウやクラレの創業者で、現在の中国銀行の創設にも関わり、倉敷の大原美術館を作った大原孫三郎（1880-1943）が出資してできた研究所で、そこが戦前のおおのいろいろな資料を収集していた。残念ながら1937年に東京に移転し、今は法政大学の附置研究所になっている。この「全日本鉞夫総連合」の旗も大原社研の所蔵資料の一つである。1920年代にはこういう旗が作られていて、労働組合の旗と言えば赤い旗というイメージができていった。

2. 『レ・ミゼラブル』と「民衆を導く自由の女神」

最近はお労働組合の旗も青や水色が多く、なかなか赤旗を見る機会がないが、つい最近久しぶりに赤旗を見たのが映画『レ・ミゼラブル』のポスターだった。ロンドンで1985年からロングランを続けているミュージカルを映画化したもので、日本では2012年12月21日に公開された。そのポスターを見ると、画面中央の主要登場人物の背景に、フランスの三色旗が林立しているが、その中に混じって赤旗が現れる。念のために数えてみると、三色旗が11本、赤旗が7本である。

『レ・ミゼラブル Les Misérables』は、かつて『ああ無情』という題で翻訳された小説で、原題は「悲惨な人々」あるいは「悲惨な境遇の人々」を意味する。これになぜ赤旗が出てくるのか。原作はヴィクトル・ユゴー（Victor-Marie Hugo, 1802-1885）の1862年の小説だが、この小説の最後の山場になるのが1832年6月のパリの民衆蜂起、「6月蜂起」と呼ばれる事件である。ここでなぜ赤旗が出てくるのか。

このポスターと似た絵柄で世界的に有名なのが、ドラクロワ（Ferdinand Victor Eugène Delacroix, 1798-1863）が描いた絵『民衆を導く自由の女神 La liberté Guidant le peuple』だろう（画像4）。民衆を導く中央の女性は「ラ・リベルテ La liberté」、擬人化された「自由」である。この絵は『レ・ミゼラブル』が描く6月蜂起の2年前、1830年の7月革命を描いたもので、「自由の女神」は右手に三色旗、左手に銃を、しかも接近戦用の銃剣のついた銃を持っている。

『民衆を導く自由の女神』の7月革命と『レ・ミゼラブル』の6月蜂起は、2年の違いなのに何が違うのか。1830年の「自由の女神」が持っていたのは三色旗なのに、なぜ2年後には赤旗が混じってくるのか。この頃の赤旗とは一体何だったのか。

ミュージカル映画『レ・ミゼラブル』後半の山場のシーンの一つに、次のようなものがある。民衆に人気のあった共和派の指導者ラマルク将軍（Jaen Maximilien Lamarque, 1770-1832）の葬式の際に、ある出来事がきっかけで軍隊と民衆の武力衝突が始まり、バリケードが築かれて

市街戦に至る、というシーンである。馬車の葬列が進む道の脇に並んでいる人たちが、軍隊を目にして「Do you hear the people sing, Singing a song of angry men? (民衆の歌が聞こえるか)」という歌を歌い始め、それがだんだん広がって歌声が大きくなっていく。すると突然赤旗を持った若者が馬車の上に飛び乗ってその旗を振り、そこから銃撃戦が始まる。なぜそこで赤旗を振るのか。そもそも赤旗とは何だったのか。

3. フランス革命の三色旗と赤旗

ドラクロワの描いた三色旗は、フランス革命の旗、フランス共和国の国旗だった。この旗は、1789年7月14日のバスティーユ攻撃の直後から使われるようになったと言われている。7月16日に創設されたパリの国民衛兵が使い始め、その後は革命を象徴する旗となり、1792年9月には正式にフランス共和国の国旗になる。

他方、フランス革命の中で新しく法律で定められて意味づけられた旗があった。それが赤旗である。それは実は危険を表す旗、具体的には戒厳令の旗だった。1789年10月に制定された軍法は、公共の安全が脅かされ、パリ市長が軍事力行使の必要を認めた場合に、戒厳令を布告することを定めている。それを知らせる旗として使われたのが赤旗だった。

パリの街角に赤旗が掲揚されたら、街角にいる群衆は解散しなければならない。集会を解散して家に帰らなければならない。軍隊が出動し、集合している人間がいたら解散命令を出す。3回解散命令を出しても解散しなかった場合には、軍事力を行使する。銃の発砲が許可される。他方、戒厳令が解除されたら、赤旗に代えて白旗が揚げられる。つまり、パリの広場や窓に赤旗が出されたら家に帰らなければならないが、白旗が出たら安心してまた街頭に出ることができる。それが軍法で定められた赤旗だった。

実際に赤旗が掲げられて軍事力が行使されたのが「シャン・ド・マルス Champ-de-Mars の虐殺」事件である。パリの練兵場だった「火星＝軍神の広場 Champ-de-Mars」(現在はエッフェル塔が建っているあたり)で1791年に起きた事件である。この年には革命は進行中だが、フランスはまだ王国で、ルイ16世とマリー・アントワネットは健在だった。しかし、王政に反対する共和主義者がここで集会を開く。

1791年7月17日の朝、事前の呼びかけに応じて共和主義者がこの広場に集まってくるが、当時は広場の中心に「祖国の祭壇」が作られていて、その布張りの下に2人の男が隠れていた。共和主義者の中には女性もいたので、祭壇の下に隠れて、集まってくる女性を下から見ようとした男だったのではないかとされている。しかし、この男たちは見つけられて引きずり出され、見せしめに首を括られてぶら下げられてしまう。この情報を得たパリ市当局が国民軍の出動を要請し、軍隊が赤旗を掲げて広場にやってきて解散命令を出す。群衆が解散しないので一斉射撃をした。この事件を描いた絵が画像5である。

この絵は19世紀の画家アリ・シェフェール（Ary Scheffer, 1795-1858）が描いた想像画で、『シャン・ド・マルスで民衆に対する攻撃を命ずるラファイエット』と題されている。ラファイエット（Marie-Joseph Paul Yves Roch Gilbert du Motier, Marquis de La Fayette, 1757-1834）はアメリカ独立戦争の英雄で、当時の革命指導者の1人だが、この時は国民軍の指揮官として、戒厳令に従って共和主義者に発砲を命じたのである。

この虐殺事件の後、翌1792年の6月には、自分の父や夫、兄や友人を殺された共和主義者が中心となって王制打倒の武装蜂起計画が立てられる。このときは武装蜂起に至らなかったが、共和主義者はシャン・ド・マルスで使われた戒厳令の赤旗をいわば逆手にとって、自分たちも赤旗を作り、「民衆の側の戒厳令」という字を縫い込んで準備する。要するに武力行使の意思表示のために赤旗を使おうとしたわけである。その後、8月10日に実際に武装蜂起が行われ、赤旗を掲げた共和主義者が王宮を占領する。この事件が一つのきっかけとなって、9月20日に革命政府は王政を廃止して共和政を宣言し、1793年1月にルイ16世、10月にはマリー・アントワネットを処刑する。こうして、これ以後赤旗は、民衆の側の政治的な意思表示、「いざとなったら武力行使も辞さない」という政治的主体としての決意表明の手段として使われるようになる。

4. 19世紀フランスの三色旗と赤旗

フランスでは、その後も繰り返し革命が起きる。1792年にフランス共和国が成立して三色旗が正式に国旗になるが、その後ナポレオンが権力を握り、1804年にはナポレオンがフランス帝国の皇帝に即位して帝政に移行する。ナポレオンは1812年にロシア遠征を試みて失敗し、1813年からのドイツ諸国やイギリスとの戦争に敗北して1814年に退位する。その結果、1814年にブルボン王朝が復活してルイ18世が即位するが、1830年7月には再度ブルボン王朝に対する革命が起きる。これが、ドラクロワが描いた三色旗を掲げた革命である。かつてのフランス革命あるいはフランス共和国を支持する人たちがブルボン王朝に反対して行った革命なので、三色旗が革命の旗になるわけである。

しかし、この革命の結果として成立したのは共和国ではなく、ブルボン家の親戚であるオルレアン家の君主を戴く王政（七月王政）だった。そのオルレアン朝の王政にも反対する共和主義者が起こしたのが、あの1832年の6月蜂起である。この時期には、「民衆の戒厳令」という字を縫い付けなくても、赤旗を掲げるだけで共和主義の意思表示になっていた。『レ・ミゼラブル』のポスターに三色旗と赤旗が混じていたのは、「革命」と「共和主義」が重なり合っていたからである。つまり、三色旗を掲げるのはオルレアン朝政府の政治に反対して革命の継続を主張する人たちだが、その中で、そもそもどんな王政であれ王政には反対だという共和主義者は赤旗を使ったのである。この時には、両者の間にはおそらく革命的意思表示の強弱の差しか

ない。

フランスはその後 1848 年の 2 月革命で再び共和国になるが（第二共和政）、「ブルジョア」と呼ばれる金融貴族層が政権を握ったこの共和国は三色旗を国旗として採用し、その政権に反対する労働者層を中心に、三色旗に反対して赤旗を掲げる 6 月蜂起が起きる。画像 6 はオラス・ヴェルネ（Horace Vernet, 1789-1863）が 6 月の労働者蜂起を描いた『1848 年 6 月 25 日のパリ、スフロ通りのバリケード』という絵で、絵の中央、バリケードの真ん中に赤旗が立っている。しかし、この蜂起は鎮圧され、さらに 1851 年にルイ・ボナパルト（ナポレオン 1 世の甥）がクーデターを起こして権力を掌握し、翌年 1852 年にナポレオン 3 世として皇帝に即位して、フランスはまた帝国（第二帝政）になる。

その後 1870 年にナポレオン 3 世はプロイセンとの戦争に敗北し、1871 年 3 月に再度共和国を宣言したフランスでパリ・コミューンという自治政府が生まれるが、この時にやはり赤旗が使われている。画像 7 はカラーの石版画で、上部に『パリの掌握（1871 年 5 月）』という題名があり、下の方に「女性たちが防衛するブランシュ広場のバリケード」と書かれている。絵の右半分では、女性たちが銃を持って武装し、赤旗を掲げている。

このようにフランスでは、1791 年に弾圧された共和主義者を中心に、赤旗を自分たちの革命の意思表示として使う運動ができ、それが 1832 年、1848 年、1871 年と、民衆、特に労働者階層が武装蜂起をしてバリケードが作られるたびに赤旗を掲げるということが伝統として成立する。したがって、フランスの場合には、もともと戒厳令の旗だった赤旗が、共和主義者や民衆による革命の旗になったということになる。

5. ドイツの労働組合旗

このようにフランスの赤旗は共和主義の旗、民衆革命の旗であり、労働組合の旗として使われるのはもっと後のことである。実は、フランスの赤旗を参考にして、最初に労働組合の旗を作ったのはドイツ人だった。画像 8 がドイツではじめて作られた労働組合の赤旗である。1863 年に結成された「全ドイツ労働者協会」の旗で、右側の写真はこの組織の創設者フェルディナンド・ラサール（Ferdinand Lassalle, 1825-1864）、左側の赤旗にはドイツ語で「自由、平等、友愛 Freiheit, Gleichheit, Brüderlichkeit」と書かれている。フランス革命の標語「Liberté, Égalité, Fraternité」をそのままドイツ語訳したものである。

ここから分かるのは、ドイツの労働組合運動自体がフランス革命の影響を受け、フランス革命を強く意識しているということである。フランス革命とその後の共和主義の運動、特に 1848 年 6 月の労働者蜂起に大きな影響を受けながら、労働者の組合運動に赤旗を採用したのである。旗の中央に握手をしている手の絵が描かれているが、これは友愛を表していると思われる。旗の下部にはドイツ語で「団結がわれわれを強くする Einigkeit macht stark」という言葉が書か

れている。

「自由、平等、友愛」、「団結がわれわれを強くする」。こういう旗が1863年に作られた。赤旗は、フランスでは街頭の革命運動の旗だが、ドイツではフランスより早く労働運動の旗として使われるようになったわけである。

この「全ドイツ労働者協会」はその後いろいろな労働者組織や運動組織と合併して拡大し、現在のドイツの連立政権与党であるドイツ社会民主党の結成につながる。現在のドイツ社会民主党は「全ドイツ労働者協会」を自分たちの歴史的出発点だと位置づけているのである。こうして、1863年からちょうど150年後の2013年にドイツで記念切手が作られた（画像9）。上部の「Deutschland 145」とあるのは1ユーロ45セントという切手の額面の数字で、1863年の旗の絵柄がそのまま使われていて、下に「全ドイツ労働者協会 150周年」という文字が入っている。

ドイツ社会民主党は1998年に政権党となり、その後2005年に今のメルケル首相率いるキリスト教民主同盟に政権が変わってからも、2005年から2009年まで、さらに2013年以降現在まで、キリスト教民主同盟と「大連立」政権を作っている。だから、ドイツ郵便がこういう記念切手を作るのは不思議でも何でもないのだろう。

画像8は全国組織の旗だったが、地方支部の旗にも立派なものがある。画像10は1872年にレーラハという町の労働組合支部が作った赤旗で、「労働者総同盟レーラハ支部」と縫い込んである。上部に書かれている組織名「労働者総同盟 Allgemeiner Arbeiter-Bund」は「全ドイツ労働者協会 Allgemeiner Deutscher Arbeiterverein」とは微妙に異なるが、やはり社会民主党に合流する組織のようである。下に「レーラハ支部 Sektion Loerrach」と1872年という数字が入っている。中央に、海の中で人魚が右手に剣を持っているという不思議な絵柄があるが、これは「正義」を表すシンボルだそうである。レーラハはドイツの南西の角、スイス国境沿いの山の中の小さな町だが、文字と人魚とその周りの月桂冠の刺繍を見ても分かるように、相当に手の込んだ、お金もかかった立派な旗である。このように地方の労働組合組織がお金をかけて立派な赤旗を作るということがドイツで始まって、そこから日本にも伝わったと考えられる。

6. 日本の赤旗

それでは、日本で赤旗が最初に使われたのはいつか。これははっきりしている。日本ではじめて赤旗が使われたのは、明治41年（1908年）の6月。東京のある集会で赤旗が掲げられ、その集会の会場から道路に出た途端、警察に逮捕されて旗は没収されてしまった、という「赤旗事件」である。画像11は大原社会問題研究所が所蔵している旗で、赤旗事件の旗と伝えられている。

この事件の旗を作ったのは、荒畑寒村（1887-1981）と大杉栄（1885-1923）である。当時の

新聞紙条例違反で仙台の監獄に入れられていた山口孤剣（1883-1920）が釈放されて仙台から帰ってくるといので、1908年6月に東京神田の料亭で当時の社会主義者たちが歓迎会を開いた。その時に大杉栄と荒畑寒村が赤旗を作ったのだが、『寒村自伝』には「イタズラ半分に作った」と書いてある。それによると、2本赤旗を作って、下宿の大家の奥さんに白いテープの文字をミシンで縫い付けてもらった。ただし、縫い付けてもらったのは「無政府共産」という白い字だったという。それを持って会場に行き、歓迎会が終わった後、その赤旗を取り出して振り回したが、その会合が終わって路上に出たら、すぐに警察官に取り押さえられた（荒畑寒村『寒村自伝』岩波文庫、1975年、275-276頁）。

その後の記述を見ると、旗は警察が押収してしまい、返却されたという話はない。また、寒村によれば縫い付けたのは「無政府共産」という文字だが、大原社研所蔵の旗の文字は「SOCIALISM」という英語である。大原社研によれば、これは堺利彦（1871-1933）が所有していた旗で、それが人手を介して大原社研に寄贈されたということである。堺利彦はたしかに赤旗事件の現場にいた関係者の一人ではあるが、これは堺利彦が赤旗事件の後に作った旗ではないかと思われる。

その後大正の末期、1920年代に入ると、日本でも赤旗が労働組合の旗として公然と使われるようになる。大原社研が昔の赤旗をいくつか所蔵しているが、画像12は1922年に結成された「日本農民組合」の「関東同盟新潟県連合会」が作った旗で、縁飾りが付いていて、中央に稲穂のマークがきれいに刺繍されている。ドイツの「労働者総同盟レーラハ支部」の旗（画像10）の月桂冠の模様にも似ている、立派な旗である。

他方、1枚ものの布で縁飾りも刺繍も無く、ただ字を手書きしただけの非常に安上がりな旗もある。画像13は、1928年から1938年頃に使われた「全国農民組合」の赤旗で、手書きで稲穂が描かれていて、中央に赤い星と鎌のようなものがある。ソ連のデザインに影響を受けているのではないかと思われる。画像14は、もう少し時代が下がった1930年頃の「全国労働組合同盟本部」の赤旗だが、保存状態も悪く、虫に食われたと思われる穴が相当開いている。だんだんとお手軽な旗になっているのが分かる。画像15は1936年頃の乗合バスの従業員組合「東京乗合従業員組合本部」の旗である。これもお手軽だが、右上に握手の図像が入っていて、「全ドイツ労働者協会」の旗とデザインが似ている。

もう一度簡単におさらいすると、赤旗そのものはフランス革命期の戒厳令の旗として始まり、それが共和主義者の闘争の旗となった。労働組合の旗として使うようになったのはドイツで、全国組織だけではなく、小さな町の支部でも、立派な刺繍の入った、手が込んでお金のかかった旗を作るような習慣ができていた。日本もおそらくそういうヨーロッパの労働組合運動に影響を受けて、こういう赤旗を労働組合旗として使うようになった。しかも最初の頃、1920年代の旗を見ると、非常に丁寧にきれいに、しかもいろいろな絵柄も取り入れて、ドイツの労働組合旗に負けないような立派な旗を作っていた、ということがよく分かる。

7. 「純向上会」の三色旗とその起源

最初に見た大阪の「映画従業員組合」の旗（画像1）には、その前に「日本労働総連盟」の旗（画像2）があったが、実はさらにまだその前があって、大阪で最初に作られた「黒・赤・青」の三色旗はどうやらこの「純向上会」の旗だと思われる（画像16）。これも大阪産業労働資料館が所蔵しているが、1922年に大阪で結成された「純向上会」という労働組合の「官業第一支部」（大阪の陸軍砲兵工廠の組合）の旗で、「映画従業員組合」の旗に比べるとシンプルだが、基本的に同じデザイン、同じ色合いの三色旗である。

赤旗を労働組合の旗に使うのが一般的な中で、突然大阪にこのような三色旗が出現する。組合結成が1922年なので、旗もその頃作られたと思われるが、普通の赤旗ではなく、なぜこのような三色旗を作ったのか。誰がこんなデザインを考えたのか。それが謎である。私もいろいろと調べてみたが、今のところ全然手がかりがない。

このデザインの由来を考えていて色合いが似ていると思いついたものの一つが、現在のドイツ国旗である。この旗は1813年に遡る。1813年にプロイセンとナポレオンのフランスとの戦争が始まった時、プロイセンをはじめとするドイツ諸国の学生義勇軍が使った旗が、この三色旗だった。フランスの三色旗を意識しながら縦横の方向を90度変え、色を変えてデザインした三色旗で、その後はドイツ統一運動のシンボルとして使われた。ただし、普仏戦争後の1871年に成立したドイツ帝国の国旗は「黒・白・赤」の三色旗であって、「黒・赤・金」の三色旗は使っていない。この旗がはじめてドイツの国旗になったのが、ワイマール共和国の1918年だった。ワイマール共和国の政権党は社会民主党なので、社会民主党政権の旗だということは日本でも意識されていただろうと思われる。

画像17は、そのドイツ国旗の中に鷲の紋章と字を書き込んだ「国旗団」の旗である。ワイマール共和国では、各政治党派が武装組織を作り、それが街頭で暴力抗争を繰り広げるようになる。一つはナチの突撃隊で、それに対して、突撃隊に対する防衛のために共産党もやはり武装組織を作る。他方、社会民主党が作った準軍事組織が「国旗団 Reichsbanner Schwarz-Rot-Gold」で、これも労働組合と同じように地域ごとに支部を作っていた。この旗の下部には「シュトゥックハイム地区協会 Ortsverein Stockheim」と書いてある。ドイツでも第一次世界大戦が終わると兵士が動員解除されて帰郷するが、軍事訓練を受けていて銃さえあればいつでも撃てる。しかも戦争に負けて帰ってきたので気持ちも荒んでいる。そういう元兵士たちがナチや共産党や社会民主党のそれぞれに組織されて、戦闘組織ができる。それが地域ごとに支部を作り、このような旗を使っていたのである。

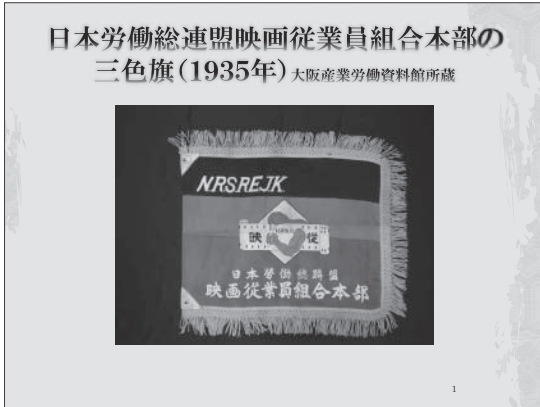
「国旗団」が結成されるのは1924年なので、1922年に作られた「純向上会」が参考にしたのは「国旗団」の旗ではないにしても、1918年以來のワイマール共和国の三色旗を見て何らかの影響を受けた可能性はないのだろうか。大阪でワイマール共和国の国旗をカラーで見る機会が

どれくらいあったのか。ニュース映画などでカラー映像を観る機会がどのくらいあったのか。それを調べる必要がある。

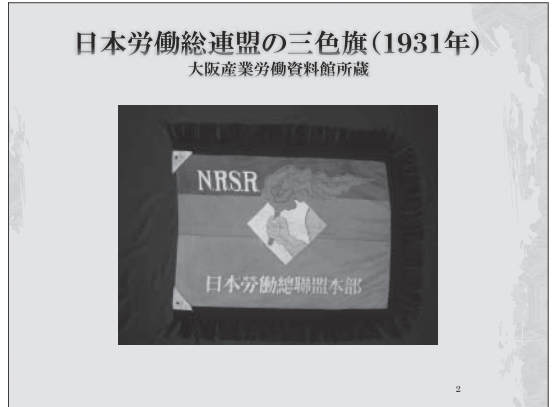
もう一つ色合いが似ていると思われるのが画像18の三色旗で、一番上は黄色だが、下は赤と青で、下2色の並びが「純向上会」の旗と同じである。デンマーク国境に近いドイツのホルシュタイン州に北フリースラントという地域があって、フリース語を喋るフリース人が住んでいる。そのフリース人が19世紀半ばに独立運動をした時に使われた旗で、今も北フリースラントでこのように掲揚されている。この旗の画像はホルシュタイン州のホームページから取ったものなので、現在では州政府に半ば公認されている北フリースラント国旗ということになる。中央に鷲などの絵柄があって、下に「Lewer duad üs Slav!」というフリース語のスローガンが書いてある。ドイツ語に訳すと「Lieber tot als Sklave」。「奴隷になるよりは死んだ方がましだ」、「奴隷になるより死を選ぶ」、という独立運動のスローガンである。しかし、1922年という時点で北フリースラントの国旗を知っている人が日本にいたとは思えない。

ということで、「純向上会」の三色旗は、ドイツ国旗と上2色は色合いが同じだし、北フリースラント国旗と下2色が同じだが、いったい誰が何を参考にしてこのような旗を考えたのかという謎はまだ解けていない。まだしばらく探索の旅は続きそうである。

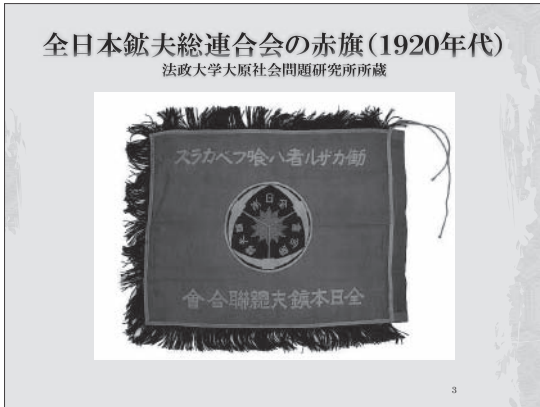
画像 1



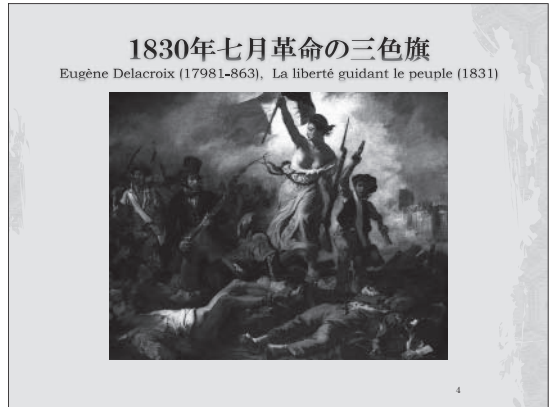
画像 2



画像 3



画像 4



画像 5



画像 6



画像 7



画像 8



画像 9



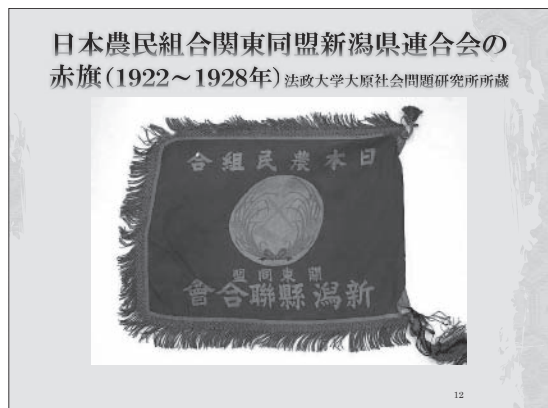
画像 10



画像 11



画像 12



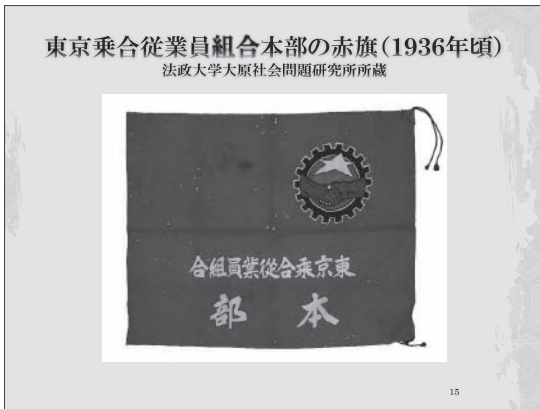
画像 13



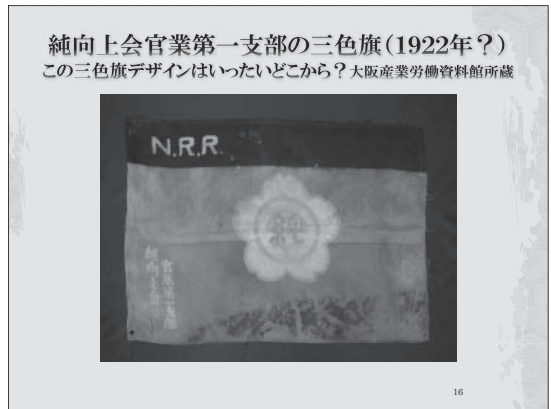
画像 14



画像 15



画像 16



画像 17



画像 18

